

## 新田開発の最前線だった うち ぬま 内沼神社



1978 (昭和53) 年に  
建てられた社殿

祭神 綿向大神  
天照皇大神  
倉稻魂大神  
市杵島姫命  
田霧姫命  
大己貴命

祭礼 4月14～15日  
8月30～31日



綿向神社勧請石柱

1952 (昭和27) 年、4社を合祀して内沼神社となりました。

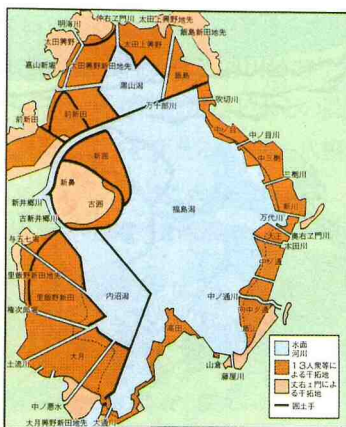
ここには、そのうちの1つ 綿向神社の由来が記された1736 (元文元) 年の石柱が保存されています。そこには、「近江国蒲生郡の沢村太兵衛が延宝年中 (1673～1681) に新発田に移り住み、孫の六郎兵衛が1730 (享保15) 年にこの地を購入し、今は田畑を開発している。1732 (享保17) 年に先祖の氏神である綿向大明神を祭り、神社を建立した」と刻まれています。内沼の開発年代を知る貴重な資料として、市指定文化財になっています。

また、祭礼には市指定無形民俗文化財の「内沼の獅子舞」と、「内沼の神楽」が奉納されます。

『北区お宝ものがたり』は、博物館などで1冊800円で頒布しています。

# 福島潟を開発して田んぼをつくろう!

## 近世の開発

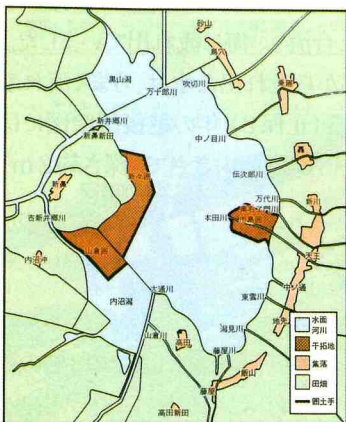


福島潟は、貞享年間(1684~88)には、水面の広さが約5,800ha(約5,800町歩)との記録があります。今の福島潟の約30倍の広さで、とても大きな潟でした。

## ■ 近世の開発

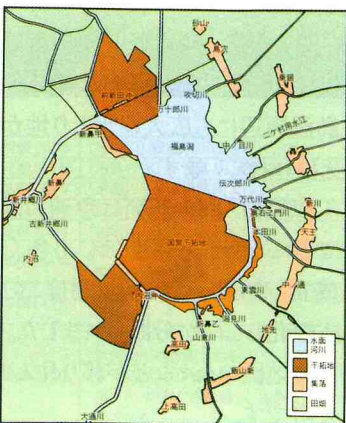
開発が進んだのは、1755(宝暦5)年に幕府が、福島潟の開発を頸城郡鉢崎村(現柏崎市)の山本丈右衛門に許可したときからです。丈右衛門は、潟に流れ込む水量を少なくするため加治川や新発田川の改修、新太田川の掘削などを行い、新鼻や太田地区など89haを開発しました。

## 近代の開発



1790(寛政2)年、水原町の市島徳次郎をはじめとする13人衆が開発を行いました。彼らは開発する場所を土手で囲み、水を抜いて水田にする方法をとりました。また、潟に流入する河川の上流から土を流し、潟の底を高くする方法もとられました。さらに、潟の全面開発を目指し、浜茄子新道、山倉新道などの堤防を築き、潟を分割しましたが、洪水などで不成功に終わりました。13人衆の開発面積は潟周辺部の452haでした。

## 現代の開発



1823(文政6)年には、潟周辺は新発田藩の預地となりました。翌年から藩では、阿賀野川から新井郷川への逆水止めの工事や土流し、各新道の堤の強化を積極的に行いました。また、ジョレンで潟の底の泥を掻き上げて田に入れるなど、田畑の安定を図り、452haの耕地を開発しました。

『北区お宝ものがたり』は、博物館などで1冊800円で頒布しています。

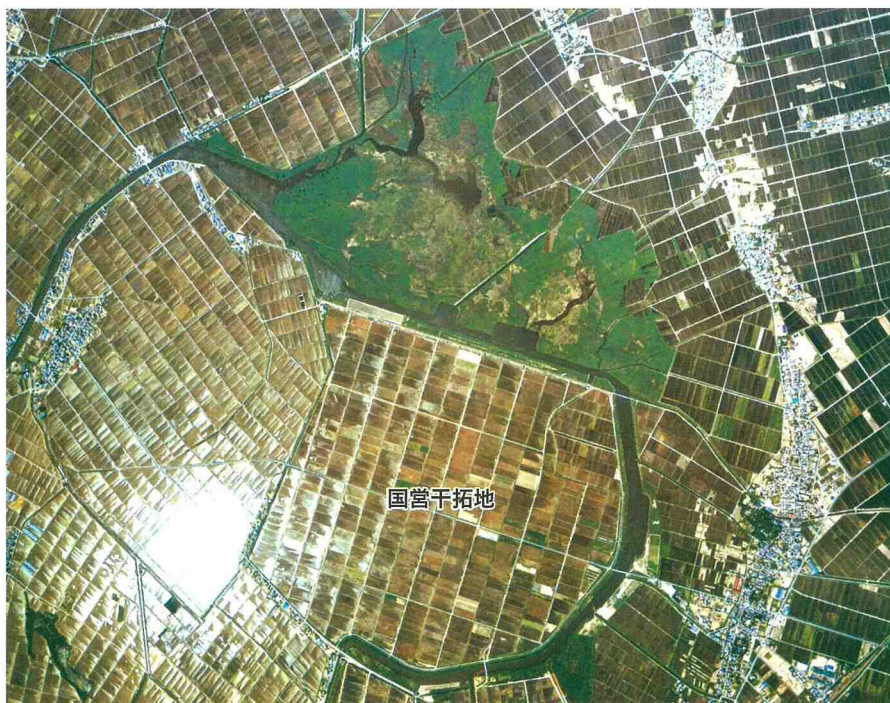
## ■ 近代の開発

新発田藩は、1855（安政2）年、潟水面540haを葛塚の齋藤七郎治や内沼の佐藤名平など豪農15人に譲渡しました。新発田藩は、近世土木技術の限界を認識し、潟の全面干拓を放棄したのです。その後、豪商といわれた葛塚の弦巻七十郎や水原の佐藤伊左衛門などに干拓は引きつがれ、1911（明治44）年に、潟は天王の市島家の所有となりました。

## ■ 現代の開発

1956（昭和31）年、国は潟を市島家から買収し、1961（昭和36）年の新井郷川排水機場の完成を契機に、1968（昭和43）年から国営干拓を始めました。23億円の費用をかけ、北側の湿地帯193haを遊水池として残し、169haの農地を生み出して、1975（昭和50）年に完工しました。

現在、遊水池はオオヒシクイ、オニバスなど生物の宝庫として国際的に注目され、人との共生を目指して新たな時代を迎えています。



国営干拓後の福島潟

『北区お宝ものがたり』は 植物館などで1冊800円で頒布しています。